

燃える地球でいかに闘うか？

2026 年 5 月 31 日

ATTAC 首都圏 講演会@文京シビックセンター

箱田徹（神戸大学国際文化学研究所）

1. 地球温暖化→地球沸騰化（グテレス事務総長） 気候変動→気候破局
 - A) 平均気温上昇、熱波、ヒートドーム、極端現象の圧倒的増加、気の遠くなる被害
 - B) 温暖化の結果は平等ではない。現実世界の「不平等」による被害の極端化
2. 気候運動は何をしてきたか？
 - A) 3つのサイクル cf. 『パイプライン爆破法』
 - 1) COPの争点化：ベルリン、京都、コペンハーゲン（2009）
 - 2) 北米キーストンXLパイプライン反対運動（2015）～NO DAPL
 - 3) 気候ストライキ・未来のための金曜日（2019）
 - B) （これと平行して…）気候キャンプ（Climate Camp）の開始（2006年～）
 - C) 「第4サイクル」はどこに？ パンデミック（2020）→ウクライナ戦争（2022）、ガザ戦争（2023）、イラン攻撃（2026）のなかでの変化
3. アンドレアス・マルムという人
 - A) 議論の背景と著作…*Fossil Capital* (2016), *Progress of this Storm* (2018), *White skin, black fuel* (2021), *Overshoot* (2024), *The Long Heat* (2026)など。
 - B) なぜ注目されるか？
 - 化石資本概念の提唱
 - 「非暴力」絶対視への批判：歴史的・理論的アプローチ
 - 運動側の戦術変化：直接行動派のインパクト 「エンデ・ゲレンデ（EG）」「エクステインクション・レベリオン（XR）」「最後の世代（LG）」「ジャスト・ストップ・オイル（JSO）」「大地の蜂起（LST）」
 - 気候運動における活動家への訴えかけ；「無力感」と「達成感」を争点化
4. 『パイプライン爆破法』（*How To Blow Up A Pipeline*, 2021=2022）

「破壊活動（サボタージュ）は論理的かつ正当性を備えた効果的な抵抗の一形態であると同時に、資本主義的所有権の神聖さへの直接攻撃でもある」…。停電する製油所、バラバラになった掘削機……こうした資産を座礁させることは可能なのだ。財物＝資本は地球に優先しない。このような緊急事態において私有財産（プロパティ）を不可侵とする技術・自然法・神の法などありはしない。もし国家が率先して自発的に障害を取り除いて道筋を作ることができないのならば、国家に代わって誰かがそれをしてしなければならない。さもなければ、財物＝資本が私たちから地球を奪ってしまうのである。

A) 本のインパクト

- 各国語に翻訳。圧倒的な注目・論争の対象。映画化 (HOW TO BLOW UP)

B) 序文

- 気候危機の加速にもかかわらず、化石燃料産業が「ビジネス・アズ・ユージュアル」を続ける現実の提示。
- COP、気候運動はなぜ地球温暖化止められないのか？という問い

C) 第1章「闘争の歴史に学ぶ」

- COP と気候運動の歴史的概括。京都、コペンハーゲン、パリ
- 2010 年代後半の気候運動ラディカル派の核心的展開とトゥーンベリの議論の接続
- 「穏健」「絶対非暴力」が気候運動のイデオロギー的束縛ではないか？という問題提起。
- 財物破壊としての直接行動 → 温室効果ガス大量排出源への投資に「リスク」を生じさせる。運動の標的としてのパイプライン、発電所、炭鉱。
- イギリス女性参政権運動 (WSPU)、南アフリカの反アパルトヘイト運動 (マンデラ、ANC、民族の槍)、アメリカ公民権運動とブラック・リベレーション運動、イラン革命、エジプト革命、パレスチナ解放運動を歴史的参照軸。非暴力主義の歴史的相対化。
- ラディカル派効果論。とりわけ、アメリカ公民権運動において非暴力性が強調されることへの問題提起 (cf. キング牧師 vs マルコム X)。急進的潮流の相互補完構造の提示

D) 第2章「呪縛を解く」

- 「サボタージュ (妨害行動、破壊活動) とは…予示的な財産の没収」→脱炭素社会を「先取りして」実現する行動としてのサボタージュ、財物破壊
- 「私有財産・財物の破壊」と対人暴力の切り離し。化石燃料インフラへの財物破壊を気候破壊による大規模な人命被害を防ぐ行為として倫理的に正当化できると問題提起
- 「アスファルトジャングルのインディアン」…ストックホルムにおける SUV タイヤ空気抜き行動。「私有財産」「財物」が気候危機の中心的問題と指摘
- グローバルノース、超富裕層における大量排出の問題化。それでも「非暴力」は絶対視されなければならないのか？という問題提起。

E) 第3章「絶望と戦う」

- 戦略論として「誰が、何を、なぜ壊すのか」という実践的問いを扱う。XR の「市民的な行動」の没階級性批判を経由しながら、財物破壊を含む直接行動が穏健派の大衆運動を政治的に有効にする条件を「ラディカル派効果」論で再整理する。
- ビジネス・アズ・ユージュアルを強制的に止める手段としての直接行動の位置づけを確認しつつ、「破局」を直視しながら変革の可能性を放棄しない立場の倫理的・政治的根拠を結論として提示する。

5. 『パレスチナを破壊することは、地球を破壊することである』 (*The Destruction of Palestine is The Destruction of the Earth*, 2024=2025)

A) 二つの破壊の連関

- パレスチナの破壊…ガザへの爆撃が続き、設定された「レッドライン」（ラファ侵攻禁止）は次々と突破された。西側諸国は武器・情報・外交で積極的に加担した。
- 地球の破壊…2023年、気温上昇は1.5°Cを超えた。同年、米国は過去最多の758件の石油・ガス採掘を新規認可。化石燃料への熱狂は止まらない。
- マルムの中心テーゼ：これは偶然の並走ではない。パレスチナの植民地化と化石燃料の世界化は、同一の歴史的起点から生じた構造であり、今日まで相互に強化し合っている。

B) 歴史テーゼ

- 1840年…化石燃料とシオニズムが同時に誕生した。英帝国は史上初めて、石炭で動く蒸気艦を大規模な戦争に投入。
- 11月…パレスチナの港市アッカーを3日未満で粉砕。推定1200~2000人の民間人を殺害。英国人さえ「引き起こした惨状に身震いする」と記した。アッカー陥落の3週間後、外相パーマストン卿が大使に書簡：「ユダヤ人のパレスチナへの帰還と定住を奨励せよ」——第1回シオニスト会議の57年前。
- 二重の節合
蒸気を戦争に投入したこと（＝化石燃料の世界化の引火点）と、パレスチナの植民地化の構想（＝シオニズムの帝国主義的起源）は同一の契機から生じた。「シオニズムは、ユダヤ的である以前に、まず帝國的なものであった」。
- エジプトのムハンマド・アリーの敗北
保護主義的な工業化（輸入代替）を進め、英国の綿輸出を阻んでいたことが開戦の直接的動機。石炭埋蔵地を持たないアリーは蒸気化できず敗北。中東の「周辺」固定化が決定。

C) 構造の持続 —— 出来事ではなく構造

- 1840年から現在まで続く「化石帝国」の論理
 1. 石炭・蒸気（1840年代）
→石油・委任統治（1917~）…中心的な産業事業＝イラクからハイファへの石油パイプライン。化石燃料インフラが土地収奪と連動した。
 2. 石油・イスラエル建国（1948~）
 - (ア) ガスと石油（現在進行形）…イスラエルの産油国化。イスラエルはレバント海盆のガスをEUに輸出。
 - (イ) ディープ・サイクル（深層循環）
化石燃料が戦争を可能にし、戦争が化石燃料を守り、化石燃料の保護が戦争の目的になる。「米軍は、一組織として世界最大の化石燃料使用者、世界最大の温室効果ガス排出者」。ガザ開戦後60日間のGHG排出量は、小国20~33カ国の年間排出量に相当する。

D) そのほかの論点

➤ 貧民殺し (paupericide)

化石燃料による気候死は意図的な殺害に近づきつつある。殺害される大半はグローバルサウスの貧者。デルタ洪水（一晩で 1.1 万人死亡、西側でほぼ無視）はその典型。

➤ テクノジェノサイド

ガザは、①最先端 AI（「福音」「ラベンダー」「パパはどこ」）で標的を自動生成、②技術的優位の奪還衝動が破壊規模を無制限にした、史上初の類型。10 月 7 日の技術的逆転が報復の無制限性を呼んだ。

➤ 「二国家解決」と「1.5℃目標」の平行崩壊

どちらも 1990 年代初頭に始まった外交プロセス。実際の投資（入植地建設・化石燃料採掘）が日々物理的に不可能に。COP と「和平プロセス」は破壊への継続投資を隠蔽するイデオロギー装置として機能。

E) 反植民地闘争と気候運動

➤ 深層構造の問題化

「脱炭素化」を技術・政策問題として扱うのは、資本主義のグローバルな収奪構造そのままパレスチナ問題が解決するという主流派の暗黙の前提と同型的。

➤ 反植民地闘争から気候運動が学ぶべき「精神」

気候運動が武装闘争を模倣すべきだとは言わない。しかし「決してあきらめない精神」「自分の尊厳のすべてがそこにかかっているかのように戦う心構え」は継承できる。

F) 「ロビー説」批判と「構造」の強調

➤ 「イスラエル・ロビーが米国を動かしている」という説はなぜ誤りか。

表層現象にすぎない。化石燃料ロビーも同じ。どちらも、1840 年から 2 世紀にわたって形成された深層構造（帝国・資本・植民地主義の連動）から生じる表面現象にすぎない。表層を攻撃しても根は断てない。

➤ 地球の破壊は「化石燃料インフラの建設」であり、パレスチナの破壊は「人种植民地の建設」→どちらも破壊と建設が表裏一体。片方を止めるには、もう片方の構造的根拠にも向き合わなければならない。

G) パレスチナと気候の「フラクタル構造」

➤ 「気候において今まさに破壊されているのは、一つの祖国ではなく、生存可能な惑星全体だ…パレスチナの経験は「ナクバの惑星版」のフラクタルである」。

→このフラクタル構造を見るためには、植民地主義・帝国主義・人種支配の論理を気候問題に接続する視座が不可欠。